優秀賞［高校生の部］

2030年バイキング式社会の実現へ向けて

神戸朝鮮高級学校3年

金 道慶 きん とぎょん

2030年の活気ある日本社会のためには、ライフステージに応じて柔軟な働き方が選択できる「バイキング式社会」の実現が必要であると力強く主張。高校生らしい夢や視野の広がり、それによって実現される多様な働き方の具体的記述が評価されました。

1. 2030年の日本

2030年の日本を予測したデータがある[1)]。人口に占める65歳以上の高齢者の割合が30パーセントを超える超高齢社会が到来し、現役世代1.7人で1人の高齢者を支えなければならなくなる。また、ひとり世帯が全体の37.4%を占める。ひとり暮らしは家族同士の支え合いができないことから、失業や病気といったリスクに弱い。労働力人口は少子高齢化の影響で激減するというのに、ニート（若年無業者）の数は増加し続け、働き手の不足が叫ばれる一方で非正規雇用率は上昇する。2030年には、15歳から34歳のパート・アルバイト・契約・派遣社員等の割合が4割近くに増えるとみられている。非正規雇用者は正社員と比べて給料も低く、雇用も不安定である。それは、20歳から34歳の若者たちの親との同居率を高めることにつながる。経済的に不安定で未婚である彼らの同世代人口に占める割合は、男女共に50%を超えると予測されている。人口は減少するが、生活保護受給者の数は増え続け、300万人に達するであろうと予測されている。日本の財政は破綻しているかもしれない。

私は、我々高校生が30代を迎えている2030年の日本を、決してこの悲観的なデータの予測通りにしてはならないと強く思う。2030年の日本を世界がうらやむような社会とするために、私は本論で、これからの15年間の日本の「新しい働き方」に基づいたバイキング式社会の実現を提案する。

2. 守るもの、壊すもの、創るもの

日本がこれから先も守るべきもの、それは平和である。70年間、どの国とも戦火を交えず1人の戦死者も出さなかったことは、日本が世界に誇れることである。しかし、たとえ戦争がなくても、貧困や環境破壊、感染症や天災の恐怖は私たちの命を脅かすものである。日本は今日まで多くの困難にも知恵を絞り、乗り越えてきた。まだまだ問題点は多くあるが、それでも国民皆保険制度を実施し、公害対策に取り組み、感染症対策や風水害の被害の防止のために多くの事業を実施し、今では世界の国々から多くの視察団が訪れるまでになっているし、日本は多くの開発途上国の発展のモデルとなっているのである。

本当の平和とは、明日を信じられることである。戦後の日本が明日を信じて生きられる社会を作ったことが、今日の日本の経済的な発展にもつながっているのだ。何よりも平和を守ることが大切である。

それだけではない。日本がこれからも守っていくものは、「和魂洋才」の精神である。戦後の日本の製造業は、欧米に30年で追いつき追い越してしまった。このキャッチアップの速さは、歴史的に日本人が異質で高度な文明・文化に触れたとき、それを素直に評価して猛烈な勢いで採り入れるという特性に由来する[2)]。しかし、私が言う現代の「和魂洋才」の「洋」は、従前の西洋だけを指すものではない。それは世界中のすべての先進的な技術や制度を意味するものである。現在、遅れをとっていると指摘されているマルチメディアの分野でも、必ず日本は和魂を持って自分のものとして消化し、より高度なものへと発展させるであろう。

2030年の数々の問題を解決し、日本が「和魂洋才」を持ってより良い社会へと発展するためには、現在の日本人の働き方を根本的に「壊す」ことが不可欠である。従来の「新卒で定年まで同じ会社で働くことがベストな働き方」だという考え方を壊さなくてはいけない。「～でなくてはいけない」というmustからの脱却が求められている。2015年の今も、多くの日本人は平和な社会で暮らしながらも、心のどこかでは「今のような働き方でいいのだろうか」「もし働けなくなったらどうすればいいのだろう」という不安の中で、日々の雑事の中でそれをごまかしながら生きているのではないだろうか。しかし我々は、2030年のデータが真実であることが証明される日に毎日近づいている。

2030年という明日を信じていくためには、新たな創造が必要である。私が提案する「バイキング式社会」とは、好きなものを好きな分だけ自分で取って食べるという食事方式からとった言葉である。例えば、超高齢社会が到来すると予想されるが、60歳や65歳という定年制を廃止するのだ。本人がもっと働きたいと希望し、会社にも利益が出るのなら、何歳になろうが働けるようにするのだ。それとは反対の考え方で、40歳をひと区切りとして会社から一度退き、大学院や研究所などで学び直すことを可能にする。または、本人の希望があるのなら、全く違う分野で働き、セカンドキャリアを積んでもらう。

少子化による労働力不足の解消には、女性の社会進出が効果的である。バイキング式の働き方は、より効果的に作用するであろう。子どもがまだ小さくて保育園にも預けられないうちは、インターネットを活用したリモートワーク（地方でネットを利用して働く）やクラウドソーシング（ネットによる仕事の発注とその請負）を活用し、子どもの成長に応じて働き方をバイキングしていくことを可能にすればよいのである。もちろん女性に限定されず、男性こそ従来の「会社第一人間」から自分のライフスタイルに合った働き方で子育てに参加することが可能になる。

また、バイキング式の働き方では、障害を持った人や人間関係に不安が強い人、健康に自信のない人も、できる範囲で仕事を選択することができるのだ。

ネット環境があれば、世界中を相手に自宅で仕事ができる。日本で就職するのではなく、日本にいながら外国の企業で働くという働き方もバイキング式働き方のひとつである。

バイキング式働き方は、日本人だけに限定したものではない。日本で働くことを希望する多くの外国人にも、日本に来てもらうのだ。ネット環境の世界的な発展により、日本語が堪能で日本が大好きな外国人が増加している。日本の社会を日本に住むみんなで支え合うのである。

3. バイキング式社会――日本の実現のために

自分の希望や条件を優先し、フレキシブルに働くことのできる社会が、私の提案するバイキング式社会である。人生は何があるか分からない。しかし、どういう形であろうと、人間は社会にコミットして生きて行くことを本能的に望むものである。年齢や性別は勿論、学歴や国籍の違いで働くことが決まる社会ではなく、誰もが自分の生をより良く生きることのできる社会――バイキング式社会の実現こそが望まれるのだ。その実現のためには、既得権を守るためだけのような規制を廃止し、より柔軟な法律に改正することが政治に望まれる。多様な働き方を奨励し、そのための起業やネット環境の充実や、多様な生き方があり働き方があるという教育を早い段階から始めることに力を注ぐことが、バイキング式社会の実現を左右するであろう。

これからの世代がわくわくする社会にするための改革、いや、革命が必要であろう。新しい「和魂洋才」が2030年の日本を世界で最も住みやすい社会にするということを、私は信じている。

文中注

1) NHKオンライン 首都圏プロジェクト「プロジェクト2030」第1シリーズ「2030年予測データ」

2) 石井威望『日本人の技術はどこから来たか』PHP研究所、1997年

［受賞者インタビュー］

今まで関心のなかったことにも視野が広がった

――コンテストに応募した理由、きっかけは？

国語の先生に勧められて応募しました。

――この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

夏休みの2～3週間ほどで書きました。

――この論文を書く上で苦労したことはありますか？

書く内容をまとめても、自分の言葉で表現することが難しかったです。

――この論文を書いたことで良かったことはありますか？

今まであまり関心のなかったことにも視野を広げられたことです。

――今、どんなことに興味を持っていますか？

海外に留学して、自分の知らない世界を見たいです。